

第6回 外国語コンテスト

英語部門

2000年度外国語コンテスト英語の部は、11月27日（月曜日）午後4：40から103番教室において開催された。2000年度は、昨年より10組ほど少なく、ほぼ一昨年並みの16組（うち一組欠席）の参加があり、約1時間半にわたり熱演が繰り広げられた。審査員は、本学教授 John Hamilton 氏と、昨年に引き続き本学名誉教授、池稔氏の2名にお願いした。司会進行役は、本学助教授片岡邦好氏が務めた。

昨年から審査内容の幅が広がり、「英文の暗唱（指定課題、または自由選択）」と「英語の歌（曲目自由）」のいずれかの選択となっている。指定課題には約10ほどの選択肢があり、童話・童謡、詩、歌、論説文、文化論など、多彩なジャンルからの選択が可能であった。これらの指定課題の中から約半数の課題が選ばれ、特に人気が高かったのは童話“ What the moon saw（4名選択）” “ Clever Beasts（3名選択）”，そしてシドニー・オリンピックにおける高橋尚子選手の活躍を描いた論説文、“ Breakaway（2名選択）”であった。これらの課題に人気が集中したのは、何よりもとつきやすさと馴染み深さが関係していたようだ。このほかにも、“ Love me do,” “ Yesterday,” “ Imagine,” “ If we hold on together ” など、ビートルズを中心に自選の歌唱課題を持ち込み、独創的なパフォーマンスを見せてくれた参加者もいた。

審査の結果は、第1位が“ Imagine ”を歌った法学部の久田裕人さん。歌唱演技の前にスピーチを行い、創作的な要素を取り入れたことが審査員の心証を高めたようだ。第2位が“ Breakaway ”を暗唱した経営学部の矢野哲史さん。第3位は、

“ What the moon saw ”を暗唱した経営学部の松元香保里さんに決まった。審査結果は、上位グループ、中位グループにおいては僅差で甲乙つけがたい状況であったが、上位のこの3名は出色のパフォーマンスを演じ、他を一步引き離して文句なしの受賞となった。

（片岡）

ドイツ語部門

多少ニュースとしては時機を失した感がありますが、恒例の名古屋語学教育研究室主催第6回外国語コンテスト・ドイツ語部門本選が昨年2000年12月5日（火曜日）205番教室で開催されましたので、結果を報告いたします。

今回から新任の島田了先生を迎えての再スタート、新鮮な気持ちでコンテスト開催を、と張り切ったつもりでしたが…。ドイツ語各クラスで授業時間にそれぞれ予選を行い、本選は参加者16名（1名は当日欠席）で競われました。島田先生が司会を、竹中が審査を担当しました。例年に比べやや参加者が少なく、また、課題文暗誦を本選では「朗読も可」としたことによって、審査基準が統一できず、「厳正な審査のもとに」というわけにいかなくなり、悔いを残すコンテストとなってしまいました。

本選参加者（受け付け順）は、長野衣里さん、鈴木隆敏君、西川寿美礼さん、竹添弓夏さん、伊藤香代さん、長谷部佑介君、渡辺智也君、竹中佳美さん、前島志保さん、八木弘君、伊藤有香さん、苅谷なぎささん、小田悦子さん、鳥見篤史君、塩屋章君、上野麻子さんの16名でした。

課題は、1年生ドイツ語統一テキストの Gabi

und Frank 第12課の暗誦、1年生のテキストですが、電話による長文の会話文で単語もかなり発音の難しいものが多く、課題文の暗誦は参加者には難解な課題だったようです。審査は、第1次審査、第2次審査に分けて、発音の正確さ、会話文としての表現力の2点を基準にして行いました。第2次審査へ進んだ鈴木隆敏君、西川寿美礼さん、竹添弓夏さん、伊藤香代さん、渡辺智也君、前島志保さん、塩屋章君の5名で優勝が競われ、結果第1位（優勝）は00J1426西川寿美礼さん、第2位00J1412渡辺智也君、第3位00J1359伊藤香代さんに決定しました。

上記3名の優秀者は12月12日（火曜日）開催の表彰式において田川光照研究室長より武田信照学長賞として表彰状と賞品が授与されました。表彰式に続いて発表会が行われ、第1位の西川さんはこの間にさらに練習を重ね、課題文暗誦を参加者の前で発表し、満場（!?）の喝采を受けました。

今回まで6回と回を重ねて来たコンテストでしたが、課題の選択、選考会の運営、審査方法のあり方等において工夫が足りなかったことを反省しています。次回からは新規巻きなおし、質的にもさらに向上した外国語コンテストを実現すべく努力したいと考えています。なお、例年のことながら、今回のコンテスト開催にご協力下さった教職員の方々、果敢に課題文に挑戦し、予選・本選に出場してくれた学生の皆さんにここに改めて心よりお礼を申し上げます。

（竹中克英）

フランス語部門

フランス語コンクールについては、出場者が多かったことが今年の特徴です。すなわち41名あり、昨年の4倍でした。その大半は2年次生でした。

コンクールの審査は、シャンソン『ミラボー橋』の作詞家で、有名な詩『ひなげし』の作者でもあるアポリネールの短編小説『アムステルダムの水夫』のテキストの朗読で行いました。発音、イン

トネーション、アクセント、表情表現など、このテキストがもつ難しさの他に、受験者は登場人物二人の役を使い分けなければなりませんでした。テキストには対話の部分が含まれていたからです。

選考には、予選という方法を採用しました。第一次予選で16人が選ばれ、第二次予選で6名、決選で以下の3名が勝ち残りしました。

- 一位、高橋 尚子 （99M3138）
- 二位、紺野由貴枝 （99J1247）
- 三位、衣川 佳憲 （99J1127）

なお、今年は学生たちの挑戦意欲がこれまでと比較して大変高かったことを指摘しておきます。

しかしながら、長い準備をさせて受験者にこの種のテキストの朗読を要求するだけでは、学生のフランス語の知識の程度を評価するのは難しいと思いました。来年度はもう少し難しい問題を出し、外国語の知識の程度がどうかを含めて、テストの条件をはっきりさせる時期が来ているのではないかと思います。たとえば、手本のテープを与えず準備なしでテキストを読ませるとか、予め選んでおいたテキストについてどの程度理解しているかいくつか質問をしてみるなどです。

（ラッセン、河原）

中国語部門

第6回外国語コンテスト「中国語部門」は、2000年12月7日（木）午後1時から213教室で「法学部・経営学部部門」と「現代中国学部部門」とに分けて開催された。それぞれの部門の参加者数は31名と13名であった。車道校舎からも1名が参加し、見事に入賞を果たした。

「現代中国学部部門」は「課題文の暗唱」と「自由課題文の暗唱」の二部門に分けて行った。「自由課題文部門」に挑戦した参加者の作文は、海外で感じた中国及び中国人についてのものが多かった。各自自ら作文した中国語を視聴者の前で暗唱して

見せた。その内容と表現力のすばらしさに初めて参加した私は感動の涙に誘われた。

「法学部・経営学部部門」では、31名の参加者があらかじめ用意された課題文を正しい発音と美しいメロディーで朗読することに努め、熱戦を繰り上げた。その後開かれた餃子パーティーにもコンテストの熱気はそのまま持ち越された。

今回の入賞者は次のとおりである。

法・経営部門

第1位	99M3488	中村 将士
第2位	97SJ1016	伊豆 明子
第3位	00J1063	田口 征吾

現中部門

・課題文の部

第1位	99C8180	林 義明
第2位	99C8044	水野 志保

・自由課題の部

第1位	99C8059	中田 美佐
第2位	99C8120	富永 清美

(鄭 高咏)

韓国・朝鮮語部門

2000年度、第6回外国語コンテスト(名古屋・車道校舎)韓国・朝鮮語部門は12月7日(木)午後1時半から名古屋校舎で開催された。

23名という多数の学生の積極的参加のもと、活発なコンテストが展開され、李 鳳姫(客員教授)、常石両教員が審査に当たった。今回も車道校舎から3名の学生(神谷 望、岩淵 肇、横尾 俊幸)諸君が参加した点は特記すべき点と言えよう。

厳正な審査の結果、入賞者は以下のごとく決定(敬称、略)

1位	98J1327	久野 幹太
2位	99C8180	林 義明
3位	98J1038	池田憲一郎

入賞は逃したものの、99M3003 榊原 丈、99J1062 原田 悠輔、00J1369 水谷 元昭、00J1146 大谷 節子、00M3312 治村 幸宏、諸君などは入賞者とほとんど差のない実力と努力の跡を示してくれた。

「下手でもよい。頑張ってみよう!」というのがこのコンテストの趣旨である。

今後も大勢の学生諸君の参加を望みたい。

(常石希望)

日本語部門

日本語部門では、外国人留学生12名(1年生7名、2年生5名)が参加しました。日本語の場合は他の言語部門と異なり、スピーチコンテストのため、発音・アクセント等、いわゆる日本語の能力だけでなく、内容の豊かさ、アピール度も重視して評価されました。発表者は、小さな身近な出来事を、異国の人でなければ気づかない視点から捉え、実に素直に自分の考えを述べていました。スピーチを聞いていた人達は、多くのことを学んだと思います。この号の最後に1位と2位の学生のスピーチを載せますので是非読んでください。

1位	99C8199	晋 斗鴻(ジンドゥホン)
2位	99C8198	高 秀希(コスヒ)
3位	99M3525	李 勤分(リキンフン)



入賞者は全員2年生となりましたが、1年生も多く参加しました(当日発表の7名は予選を通った人のみ)。残念ながら1年生は、まだ日本語能力の点で多少問題があるせいか、入賞できませんでしたが、彼らのスピーチはとても新鮮で、心打つ良いスピーチでした。彼らには是非来年度も発表してもらいたいと思います。

(山本雅子)

《日本語コンテスト入賞作》(原文のまま)

第1位 日本のおもしろい若者
現代中国学部2年 晋 斗鴻

私は韓国からの留学生で、日本に来てもう3年になります。私はこの3年間の日本生活で、日本語や日本の文化など様々なことを学びました。今日はその中で、一つ感心したことについて話させていたきたいと思います。

私が日本に来て間もない頃、名古屋の栄に行ったときには本当に驚きの連続でした。それは、栄の町並みがあまりにも韓国と違っていたからとではなく、そこにいる若者があまりにも変だったからです。黒人に間違えるほどの黒くて不気味な化粧に下着が見えるほどの短いスカートはいて道に座っている女の子、黄色くて長い髪をしたきれいな男の子、白いタオルで顔を隠してバイクに乗っている暴走族、電車で年寄りの人が乗ってきても席を譲らない若者。それに比べると韓国の若者はすばらしい。年上の人によく挨拶をするし、電車でも年寄りを見かけたらすぐ席を譲るし、男の子は男らしいし、女の子は女らしい。韓国の若者のことが私の中では韓国人の自慢の一つになったし、変な若者を持つ日本の未来が心配にもなりました。

しかし、その若い人に対する私の思いが、大学に入って日本人の友達ができてからかなり変わってきました。その理由は、日本の若者の生活に感心してしまったからです。わたしの友達のなかに

天野という友達があります。その天野という友達は今年19歳で、もうそろそろ20歳になるにもかかわらず、わがままな性格で、どうもまだ子どもみたいところがある友達です。しかし、その生活をのぞいてみると驚いてしまいます。週に3・4回学校が終わった後にアルバイトをして、そのたまったお金をおこずかいにして学費以外は親から一銭たりとももらわない生活をしているからです。また、同じ学部の小百合という名前の女の友達は英語が習いたくて、この学校以外に英語の専門学校に通っているんですが、その学費の全てを自分でアルバイトをして、そのためにお金で払っている友達もいます。もちろんこの二人は例としてあげただけで、この二人以外にもほとんどの学生達がこの二人と似たような生活をしています。この若者達の生活は韓国と日本の若者に対する私の思いを変えるほどの驚きでした。ここにいる日本の方は、えー！何で驚いたんだろうそんな当然なこととされるかもしれませんが、しかし、その当然と思われる大学生のアルバイトが隣の国韓国では当然ではないのです。今から10年前のことですが、韓国で大学に通っていた私も全然アルバイトなんかしなかったし、学費はもちろん何にもかも親からもらったお金で生活をしました。これは、周りの学生達もみんな同じでしたし、現在もあまり変わっていないと思います。もちろん韓国と日本の社会構造が違うところはありますが、それにしても日本の若者の生活はすばらしいです。

普通、年寄りの方はどこの国でも若い人のことをあまりよく思わない傾向がありますが、特に日本の年寄りはそうだと思います。しかし、それは日本の年寄りが若者の変な格好だけに目が行ってしまって、経済大国日本を支えている若者の良いところまで見ていないからだだと思います。だから、日本の年寄りも、私が韓国の若い人の礼儀正しさを韓国人としての自慢に思っているように日本の若い人の良さを誇りに思うべきだと思います。さらに、もっと言いたいのは、私が日本の若者の変な格好にこだわって、若者ことを悪く思っていたのと同じようなことが、私たち韓国人と日本人の

間にもあるのではないかということです。私たちはあまりにも歴史問題にこだわりすぎて、お互いのいいところがみえていないのではないのでしょうか。私は日本の若者と友達になって、ようやくその良いところをみることができました。

ここにいる皆さんはどうですか？何か、韓国のことを知っていますか？私が日本の若者に偏見を持っていたように、韓国人に対して何か偏見は持っていますか？もし、そういう偏見があったら、ぜひそれを乗り越えるように努力してほしいです。これは、もちろん韓国人にも同じです。それで、このお互いの努力が20世紀の暗かった歴史を21世紀には明るい歴史に変えるのではないのでしょうか。御静聴ありがとうございました。

第2位 一緒に作っていきませんか
現代中国学部2年 高 秀希

私は去年の四月に日本へ来ました。韓国の空港で家族・友達と泣きながら別れをつげたのが昨日の事みたいはまだ生々しいですが、それからもう1年8ヶ月も過ぎました。この間に、色々なことを体験し、一人で悩むことも、面白いことも、不思議だと思ふこともいっぱいありました。今日は、体験した事を二つの側面から、私の意見と感想として皆さんに話したいと思います。

私は日本人と同じ一人の新生入生として愛知大学に入学しました。私は他の留学生とは違って高校を卒業してから直接日本の大学に来たので、学校生活の中で色々な指導を期待していました。しかし残念ながら、必要がなければ、話してくれない人が本当に多かったのです。その時は私の日本語も下手だったので私の方から先に話しかけることもできなかつたし、留学生だからこのように待遇されているのだと我慢するしか仕方がありませんでした。日本人の輪の中には本当に入りにくいと思いました。

しかし中には留学生を家族みたいに考えてくれる人もいました。私たち留学生を色々助けてくれ

るボランティア活動もありました。例えば、自分の家でホームステイさせてくれたり、花見に行く時やお正月の時誘ってくれる人もいました。また現代中国学部の中にも留学生の事にいつも協力してくれる学生たちもいます。この場合は、逆に留学生の立場が本当に幸いな事です。日本人の学生なら、こんな待遇はたぶん受けられないでしょう。

私はこの前、一泊二日のホームステイで、千田さんの家にお邪魔することになりました。その時、家族みんなと一緒に食べたおばさんの手作り料理の味は今までも忘れることができません。特に私が韓国人だから食事には欠かせないだろうとってキムチまで用意してくれました。食事の後には千田さんの車に乗ってイベントを主催した団体の会館に向かいました。そこでは着物を着させてもらいましたが、カメラまで用意してくれた千田さんは、私が着物を着る過程を一枚一枚全部撮ってくれました。本当に嬉しかったです。千田さんは自分がやったことを小さな事だと思ふかも知れませんが、私はその小さな心配りに感動しました。小さなことから大きなことを学びました。それはこのように小さな事までも親切にやってくれる、しかもそれをごく自然にやってくれるその細かい心配りが日本人の長所ではないかということです。私は感謝すると同時に本当に心から感動しました。

それからしばらくの事です。私はお好み焼き屋さんでバイトを始めました。店は店長さんと店長さんのお母さん、私3人でやっています。10時になると営業時間が終わって、それからは楽しい食事タイムです。ある日、10時になって私はもう終わったが、店長さんとおばさんはまだ後片付けをしていました。私はテーブルに置いてあるご飯の前で店長さんとおばさんが来るのを待っていました。すると、店長さんが「先に食べや」と言いました。「はい」と答えたが、なかなか箸をつけることができませんでした。韓国では目上の人と食事する時必ず目上の方がスプーンを取って、食べ始めてから食べるのが習慣になっています。店長さんはそんな私を見て「韓国人はやはり礼儀正しいなあ」とほめてくれました。私はその時初めて

「私にもそんな良さがあるんだな」と自分も知らなかった良さに気づきました。

この二つの体験を通じて私は強く感じたことがあります。それは日本人と留学生には、お互いは自分たちも気づいてない良さがたくさんあるはずだということですから、お互いの良さを見つけて、認め合うことから始め、それを重ねて行けば、今までなかった何かがきっと作られるはずです。それも今までであったものよりもっといいものが作られるはずです。その何かを皆さん一緒に作っていきませんか。

名古屋語学教育研究室のホームページを開設しました。

アドレスは

<http://leo.aichi-u.ac.jp/~goken/>

『01 公開講座「言語」のご案内』

愛知大学言語学談話会

前半 豊橋校舎 / 後半 9月より車道校舎
午後2時半～4時半

2001年

7月7日 「主語、目的語、その他の文構成要素 W. クロフトの文法関係論を中心に」
伊藤忠夫（中京大学教養部教授）

9月22日 「ロシア語の移動表現について」
清水伸子（愛知大学経済学部講師）
「EUにおける言語教育政策 オランダの外国語教育の現状」
平尾節子（愛知大学法学部教授）

10月13日 「身体と空間」
片岡邦好（愛知大学法学部助教授）
「近代初期イギリス人の国語観、国語問題」
多田哲也（愛知大学法学部助教授）

11月10日 「飲食に関する中国語の楽しい表現」
鄭 高咏（愛知大学法学部助教授）
「漢詩の流れ 詩形を中心に」
矢田博士（愛知大学経営学部助教授）

12月8日 「学習文法とコーパス⁽³⁾」
塚本倫久
（愛知大学国際コミュニケーション学部助教授）
「大学における中国語教育の再検討⁽²⁾」
安部 悟（愛知大学現代中国学部助教授）

2002年

1月12日 「日本語話者がフランス語を通して見た韓国語」
田川光照（愛知大学経営学部教授）
「漢字文化圏における表音文字の背景」
陶山信男（愛知大学名誉教授）

編集後記

21世紀は日本の世紀である、などと煽てられ、日本中が浮かれ騒いだのは10余年ほど前のことである。儲けをたくらんで株を買い漁った経済官僚や経済学者が何人も損をして、彼らの学説の化けの皮が剥がれた。景気浮揚の学説はないものか、いろいろ説を唱えるものはいるようだが、世の中は理論どおりにはうまくいかない。

この惨めな日本にかわって登場したのが、中国である。封建時代、毛時代と民衆は長きにわたり貧しいままに捨て置かれていたから、富への渴望は、当然ながら、異常なほど激しく、今世紀が中国の世紀になることは間違いないであろう。13億の民がいま金持ちになるため競い合っている。

しかし、この資本主義を指揮しているのが共産党というのだから、驚きである。共産主義運動が民衆を解放し、平等という価値に目覚めさせたその歴史的功績は高く評価されるべきだが、共産党にとって、欲望が人間を労働に向かわせるものである、衣食が満たされてもそこで欲望が消え去るものではない、飽くなき欲望こそが社会発展の原動力であることが分かったいま、共産党も昔のままでいてはならないであろう。20世紀までに政治・経済・文芸・芸術など多くの面で主義主張が出尽くした感がある時、我々は共産的資本主義とも呼ぶべき新しいモラル獲得の壮大な実験場に立ち会っていることになるのであろうか。それはつまり外資を利用して経済規模を拡大し富の高上げを実行して、得られた富の分配を世界中どこにも前例のない公平さで行うことであろうか。服部先生の記事を読みながら、こんなことを思ってみた。

(S. K.)